

南方往生の企て——補陀落渡海の諸相——

根 井 浄

皆さんこんにちは。はじめまして。というよりも駒澤大学ではいろいろな学会で発表させていただき、またお世話になっていることでもあります。

先ほどは、日頃から仲良くさせてもらっている坂口博規先生からご丁寧なご紹介を頂き、まことに光栄に存じます。また、先ほどは佐藤道子先生のご講演を後ろの席から聞いておまして、なんと細やかな、豊かな学識に裏打ちされたお話でして、改めて胸が熱くなったことでもあります。その後に私が話をするのは、何か幼稚ぼい感じが致します。そのような話になるかと思いますが、しばらくの間、時間をいただきたいと思います。よろしくお願い致します。

本日、私が持つて参りました話は、観音信仰としての補陀落渡海の話です。補陀落というのは、観音菩薩の浄土、観音の居所でございます。サンスクリット語のポータラが漢訳されて、補陀落とか普陀洛とか表記されています。本来、ポータラは、港とかボートという意味だそう、現実的には中国揚子江河口に浮かぶ舟山列島とか、

南印度の海島であるとか、いろいろと想像されました。

そうした観音の浄土である補陀落世界に実際に行つてみよう、観音浄土に往生したいという願望で、多くの人が南方海上の補陀落世界に向かつて船出しました。一見、無謀とも思えるこの行為は、観音にたいする実践的な信仰表出でありまして、これを補陀落渡海と呼んでおります。補陀落は日本では太平洋の南方海上にあると想像され、特に和歌山県的那智の海岸からは多くの人々が勇猛果敢に補陀落渡海を試みました。記録的には九世紀の平安時代から見えはじめ、精神的には近代の明治時代まで断続的に、あるいは集中的に実践、継承されてきました。

補陀落といいますが、もう死語になったような言葉でございます。とはいえ、十七世紀初頭、一六〇三年ごろに日本語をポルトガル語で説明し出版された『日葡辞書』には「補陀落」「補陀落に渡る」「補陀落船」などの語が立項、説明されておりまして、十五世紀末から十六世紀初頭には日常的な言葉であつて、平常、補陀落渡海が実践されていたことを伝えております。

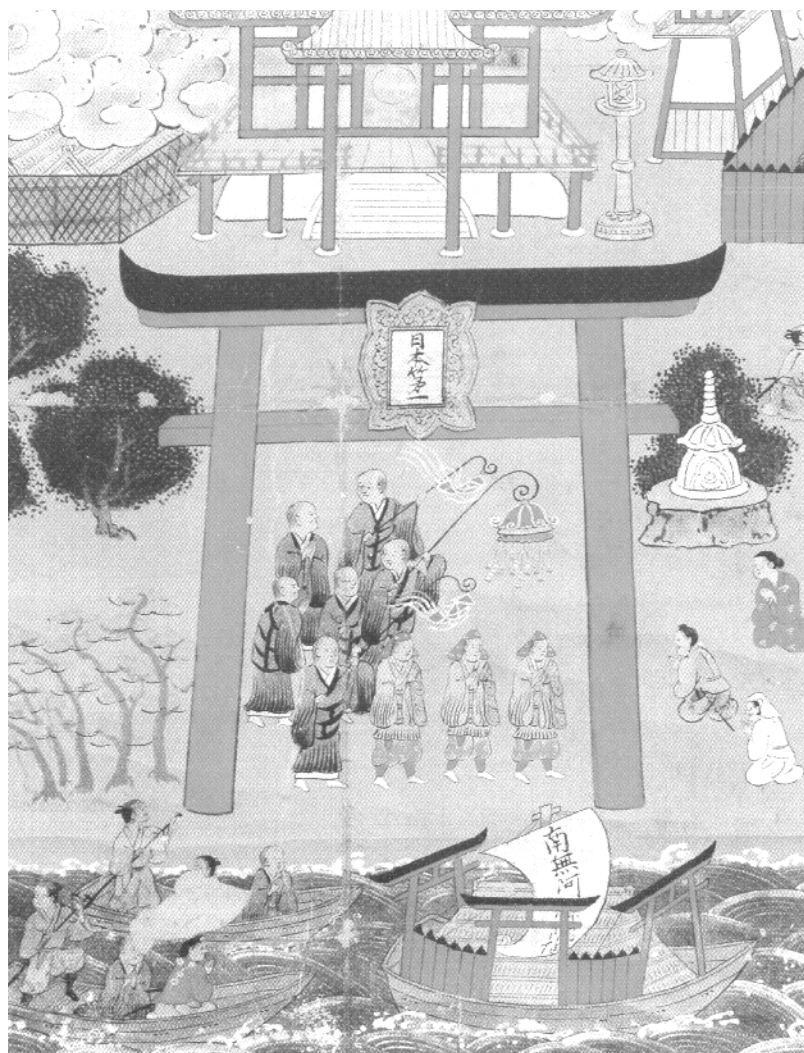
実はこの夏（二〇〇五年）八月四日に栃木県の日光に参りまして、講演の後におこなわれた中禅寺湖での船禅頂という行事に参加してきました。船禅頂とは日光山を開いた勝道上人の遺跡を船で巡る法要行事でございます。それに参加してまいりました。特別の船を用意していただき、中禅寺湖周辺の普段には拝めない所を案内していただきました。中禅寺湖に浮かぶ船から周囲全体を見回しますと、男体山、補陀落神社、中禅寺などが遠望でき、これはやはり教典や古記録に説く観音浄土そのものの自然景観を有しているなあと、思いがけない感動を味わいました。空海は『性霊集』のなかで開祖勝道上人を讃える碑文を書き、二荒山（日光山）は補陀落山と言いつつあります。本日の話の中心となります和歌山県的那智も、那智湾の海上から妙法山や那智の白い滝筋が見えまして、ここもまた教典や古記録にいう観音の浄土だなあ、と改めて感慨を覚える所です。山もあれば湖も滝もあり、その滝

の水が大海に流れる、そして仰ぎ見る山上の岩窟に三十三体の観音たちが結跏趺坐している、こういう自然景観のところに日本の観音信仰が定着してくるのだなと思った次第でございます。私はいつも文献ばかり追いかけていますが、ときおり文献が読めないことがあります。その時には現地に出掛けるように心掛けておりまして、歴史や文学の現地に立って、理解できない文献を深く読み込み、解釈するような研究方法をとっているでございます。

観音浄土に向かって船出する補陀落渡海。この補陀落渡海は幸いにも絵画資料にも見出すことができます。「那智参詣曼荼羅」という絵画作品であります。「那智参詣曼荼羅」は、現在、私どもは国内外で三十四本確認しております。その画幅の下に補陀落渡海の様子が描かれているのです。那智の海岸に大きな鳥居があり、後方には補陀洛山寺という千手観音を本尊とする堂があります。そして大鳥居の中央には赤い烏帽子をかぶった渡海僧が立ち並び、海岸には異様な補陀落渡海船が浮かんでおり、その後方には二艘の小舟が浮かんでいます。今まさに、補陀落世界に向かって出帆しようとしている場面です。

「那智参詣曼荼羅」に描かれた補陀落渡海の場合は、繰り返し申しますが和歌山県的那智の海岸でございます。と、いたしますと、補陀落渡海の最も根本的な場所、拠点となった場所、母港は紀州的那智の海岸にありました。したがって、熊野那智の周辺は早くから観音信仰が広く定着しており、多くの文献に出てまいります。

たとえば、藤原頼長の『台記』という平安期の日記には、熊野検校の役職に就いたことがある覚宗が、少年僧の思ひ出として那智僧の渡海を実際に見たという記事があります。保元の乱でも有名な藤原頼長は、それはいつの時だったのかと尋ねると、覚宗は「堀河院御時也」と答えています。この平安期における、十二世紀中期の、それよりもっと以前の古い観音信仰と同時に、補陀落渡海が、やはり実際におこなわれていたことを物語っています。その場所が那智の海岸であったのでございます。



補陀落渡海図（那智参詣曼荼羅・藤浪家本）

那智の海岸は、現在でも美しい海岸線を保っております。藤原宗忠の日記『中右記』によりますと、宗忠が息子二人を伴って天仁二年（一一〇九）十月に熊野三山に参詣した時の記録として、那智の海岸付近を「補陀落の浜を行く」と書いています。「那智の海岸」と言わずに「補陀落の浜」と書いているところに、われわれは平安時代における観音信仰の場所として、ここそが補陀落渡海の場所であったことを確認することができるのであります。

本学の水原一先生が研究をなさっている『平家物語』にも補陀落渡海に関する一節があります。平維盛の那智における入水往生譚であります。『平家物語』諸本によりますと、維盛一行が屋島を脱出したしまして、高野山を巡り、あるいは『平家物語』延慶本によると粉河寺も巡って、熊野三山に参詣し、そして最後に落ち着いたのが那智の海岸でありました。滝口入道の説教を受けて維盛は那智の海岸に入水するわけです。維盛たちの入水往生譚が、わざわざ各地の霊場をめぐって那智を選んで入水するというのは、話の前提として那智の浜が補陀落の場所であり、維盛はここに入水することによって補陀落往生したという説話を構成しているのではないか。『平家物語』は維盛の入水について補陀落往生とは一言も語りませんけれども、私はむしろ語らないところに、維盛の那智入水往生は補陀落信仰が前提となっていたと考えているのでございます。

次に、鎌倉時代の補陀落渡海について話をさせていただきます。鎌倉時代の補陀落渡海で最も有名な、最も典型的な話は、頼朝の御家人であつた下河辺六郎行秀という武士の渡海でございます。『吾妻鏡』によりますと、建久四年（一一九三）四月、下野国の那須野において頼朝が主催した鹿狩（巻狩）がおこなわれました。その時に優秀な射手二十二名が選ばれました。しかし、頼朝は側にいた下河辺六郎行秀に、勢子の中に囲まれた大鹿一頭を射ることを命じました。ところが、下河辺六郎行秀が放った矢は外れ、鹿が逃げてしまったのです。これを見ていた小山四郎左衛門尉朝政が、とっさにその鹿を射たのでございます。失態を演じた下河辺六郎行秀は、その場で髻を切

つて出家、逐電し、行方をくらしました。出家名は智定坊と号しました。その後の行秀の行方は分からなかったのですが、天福元年（一二三三）五月、北条泰時に宛てた智定坊の書簡一通が幕府に届き、將軍の前で読み上げられました。その智定坊書簡によりますと、智定坊は、紀伊国熊野山で『法華經』を讀誦して修行していましたが、やがて那智の海岸から補陀落渡海に及んだという情報でした。智定坊は渡海に臨み、書簡一通を弓馬の友であつた北条泰時に届けるように同法（仲間）に託したのです。補陀落渡海を斷行した智定坊の話は、將軍側近の人々の感涙を催しました。智定坊（下河辺六郎行秀）が乗った補陀落渡海船について『吾妻鏡』（天福元年五月二十七日条）は次のように記しています。

彼の乗船は、屋形に入る後、外より釘をもつて皆打ち付け、一扉も無く、日月の光を觀るも能はず、只、燈に憑るべし。三十ヶ日の程の食物、併びに油等、僅かに用意すと云々。

智定坊が乗った補陀落渡海船は、屋形に釘が打ち付けられた脱出不可能な船でありました。したがって、大きな帆に北風を受け、南方にあるといわれた補陀落世界に向かつて船は進んでいったのだと考えられます。屋形船は人間一人がやつとしやがみこんで乗れるような箱船であつたようです。私の想像ですけれども、智定坊は手足も十分に伸ばせなかつたことでしょう。つまり、人間の一番小さい形をしたと思います。それは母親の胎内にいる格好です。両膝を両手で抱え込んで丸くなる姿です。この姿勢を持続させるのは修驗道の大峰修行にもありまして胎内行といいました。おそらく智定坊は、そのような姿勢をとつて乗船したのではないかと想像しております。そしてまた、胎内にいるということは、やがて母親から生まれる、やがて再生、往生するという思想を含んでいたと思

われます。補陀落渡海は現実的には「死」という形態をとるのでありますが、「死」を賭して実践される場所に補陀落渡海の本義があり、そこには「生」が約束されていたに違いありません。補陀落往生、南方往生であります。問題は、智定坊（下河辺六郎行秀）が補陀落渡海に及んだ直接の動機が、鹿狩りの失態であったのか、どうであったのかということです。私の史料操作によりますと、智定坊は矢を射損じて四十年後に補陀落渡海に及んだことになります。この四十年間の経緯と真意は熊野修行中に潜んでいるのですけれど、この期間の智定坊の心中に何がおこったのか、いろいろと想像するわけですが、文献では一切わかりません。

そもそも智定坊のことは『吾妻鏡』天福元年五月二十七日条の一回だけの記事でございます。『玉葉』など鎌倉時代の史資料を随分調べましたが、残念ながら智定坊については『吾妻鏡』一回きりでございます。江戸時代の伝承記事はありますが、当時の記録としては『吾妻鏡』記事一回きりなのです。そこで、なんとかして智定坊なる鎌倉武士を紡ぎ出す方法はないものかと考え、私は智定坊、すなわち俗名であった下河辺六郎行秀の「下河辺氏」という武士団について調べました。結果だけ申しますと、下河辺氏は藤原秀郷を鼻祖として、代々、弓馬の術を体得し、その故実を伝授していた武士団でありました。鎌倉幕府を構成した武士団には多くを数え、たとえば北条氏をはじめ、佐藤氏や海野氏、工藤氏、小山氏と色々な武士団が集まっていました。殊のほか、下河辺氏は流鏑馬や弓術の故事と子細を伝える伝統的な武士団であったのです。となると、下河辺六郎行秀も下河辺氏の一人として弓術の秘技をもっていたと考えられます。

この推定は、本学の坂口博規先生がずっと研究なさっておられます西行も、出家以前は「秀郷朝臣以来九代の嫡家相承の兵法を伝えていた佐藤憲清（義清）」という武士でありました。よく周知されていることでもあります。頼朝は、俊乗房重源の委託を受け、東大寺大仏鍍金調達の勸進聖として陸奥国に赴く途中の鶴岡八幡宮で西行を見だし、

歌道、弓馬の事について尋問しました。西行は次のように返答しています。

弓馬の事は、在俗の当初、愁（なまじ）に家風を伝ふと雖も、保延三年八月遁世の時、秀郷朝臣以来九代の嫡家相承の兵法は焼失す。罪業の因たるに依つて、其事曾て以て心底に残し留めず、皆忘却し了んぬ。詠歌は、花月に対して動感するの折節は、僅に卅一字を作る許なり、全く奥旨を知らず（『吾妻鏡』文治二年八月十五日条）。

また、北条泰時は、当時在京していた子息・時氏に宛てた書状のなかで、下河辺行平、工藤景光の精銳が言い伝えたものとして、弓術の教訓を次のように書いています。

弓取りと云は、必唯心の上手に有、されば寝ても覺ても此態を思はなすべからず、せめては弓を張て置ても、一日に三度はすびき（※素引き）をもすべし、それも心のうちに、少あてをすることなくてはすべからず、増てうるはしき箭をはげて（※矧て）、あてがはん時は、遠物近物、大なる物小きもの、すべては女のみん所にても、亦堅固に人のみざらん所などにもあれ、唯御所の御弓場に立て、千万の人々にみらるゝ心仕にて、儀式をわすれず、あだには物を射るべからず、箭を放む度には、此矢ぞ最後、もし射はづしなば、二の矢をとらぬさきに、敵にも射とられ、又は生物にも喰殺さるべき身と思籠て射べき也（『鎌倉遺文』七卷・四四九六号文書）。

さらに吉田兼好も『徒然草』（九十二段）の中で、ある人の申すとして、先の「泰時書状」とほぼ同趣の心得と、弓者のうちに潜む懈怠心の自省を述べています

ある人、弓射る事を習ふに、諸矢をたばさみて的に向かふ。師の言はく、「初心の人、二つの矢を持つことなかれ、後の矢を頼みて、初めの矢になをざりの心あり。毎度たゞ得失なく、此の一箭に定まるべしと思へ」と言ふ。僅かに二つの矢、師の前にて一つを疎かにせんと思はむや。懈怠の心、身づから知らずといへども、師これを知る。此の戒め、万事にわたるべし。

鎌倉の御家人たちの中には、それぞれの家に伝わった「箭を放む度には、此矢ぞ最後」、「二つの矢を持つことなかれ」という精神が連綿として続いていたことが理解できます。鎌倉武士にとつて弓馬の秘技を体得することは一同に垂涎的であつたのです。とすれば、智定坊（下河辺六郎行秀）も、建久四年、那須野の巻狩りで大鹿一頭の射を頼朝から命じられたほどに、弓術に秀でた下河辺氏の伝統的な秘技を享受していた御家人であつたことは、もはや動かない史実と思います。

射手として、たかが一矢、一回の失態とはいえ、行秀の出家、逐電の精神は、あり得たと思われまふ。むろん、智定坊の鹿狩での失態、出家がただちに補陀落渡海へと押しやった、と短絡的にいうことはできないでしょう。繰り返しますが、智定坊が補陀落渡海を決行するに至つた経緯と真意は、熊野での修行期間が鍵をにぎっています。智定坊の熊野修行期間に何があり、彼の心中に何がおきたのか、それをいま、史料で明らかにすることは残念ながらできません。同法に託して北条泰時に届けた智定坊の書状には、『吾妻鏡』にみえる記事以外に何を書いてあつたのでしょうか。智定坊の書状をめぐつては隔靴搔痒の感があります。いずれにせよ智定坊の補陀落渡海は、『吾妻鏡』のみの一件、一回記事とはいへ、日本の補陀落渡海史を貫通する深い根をもっているのです。

さて、同じような鎌倉時代の補陀落渡海の中でもう一人渡海した人がいます。実勝坊弁海という人物です。実勝坊（実証坊）は紀伊国の湯浅氏からでた僧侶です。湯浅氏といえば明恵上人も湯浅氏の一族でありました。実勝坊は明恵上人の弟子であつたようです。

『四座講縁起』（天文十九年書写）という一軸によりますと、明恵上人の『四座講式』は、寛喜四年、明恵の没後、実勝上人なるものが引き継ぎ、建長八年まで二十七年間にわたつて勤修したといわれ、かつ実勝は年来の宿願によつて、康元二年（一二五七）正月二十七日、土佐国室戸から一身一葉の船に乗つて補陀洛往詣の素懷を遂げたと伝えます。四国の室戸といえ、長保三年（一〇〇一）賀東上人が渡海した場所でもありました（貞慶『観音講式』）。また後深草院二条が『とわずがたり』で足摺岬の補陀落渡海説話を叙述し、『蹉跎山縁起』が享徳四年（一四四五）沙弥正実の渡海を伝えますように、四国の室戸は足摺岬と同様に補陀落渡海の間所として著名な所でありました。

では実勝坊とはいつたどのような人物であつたのでしょうか。簡略に申しあげますと『湯浅氏系図』（上山勘太郎氏蔵）に湯浅宗弘の子息に弁海とみえ、注記として「実証上人／補陀落山渡畢」とあります。先の『四座講縁起』にみえた実勝坊の補陀落渡海の記述と符合するようです。また湯浅宗業が弘長四年（一二六四）に書いた「智眼置文」（京都・高山寺蔵）の一節によりますと「實勝房辨海南山渡海の事もこの所に□住せられてのち、ことにおもひたゝれたりける、……六月十八日、湯浅の浦をいてられぬ」とあります。「智眼置文」は『星尾寺縁起』ともよばれる無表題の卷子本一巻でありまして、七十歳に近い宗業（智眼）自身が筆をとつてしたためたものです。この『星尾寺縁起』は上部の一字ないし数字が欠損する難読の文書でありますが、実勝坊弁海は、某年の六月十八日に紀州湯浅の浦を出て四国の室戸に渡り、これまでの想いを綴つた書簡を宗業のもとに寄せました。それはとりもなおさず「南山渡海」、つまり補陀落渡海のことでありました。実勝坊が渡海を思い立つたのは星尾寺に身を寄せたのちであり、

渡海の決行も星尾寺にしばらく止住していたことが機縁であつたのであろう、と宗業はしみじみと述懐しているの
であります。

星尾の地は明恵が春日大明神の託宣によつて印度渡航を断念させられた遺跡でもありました。また智定坊の渡海は湯浅氏の領地・糸我荘から幕府に報告されておりますので、湯浅一族には智定坊の補陀落渡海が語り伝えられていたと思われます。といたしますと、実勝坊の補陀落渡海は、一個人の問題ではなく、先行する智定坊の補陀落渡海と、釈尊の遺跡を訪ねようとした明恵の渡航計画が実勝坊の心に働いていたのではないかと私は考えています。

さて冒頭でも申し上げましたように、日本の補陀落渡海の最大の母港は和歌山県的那智にありました。その海岸線の奥には補陀洛山寺という寺院があります。現在は西国三十三所観音巡礼第一番札所の青岸渡寺の末寺になっております。この補陀洛山寺には天文年間まで全国から渡海を希望する人たち、渡海を眼目とした修験山伏たちがたくさん集まつて来ました。そして、補陀洛山寺の住職になった人は、一つの宿命として補陀落渡海を果たさなければならぬ、そういう住職たちでありました。したがいまして、補陀洛山寺住職たちの補陀落渡海の記録が残っているのです。本日、皆様方に提示しました『本願中出入証跡之写別帳』は、まだあまり一般に知られていない文献ですが、ここには補陀落渡海の伝承記録と十八名の渡海僧（住職）の名前を知ることができます。

もうひとつ、補陀落渡海の文献史料として『熊野年代記』があります。この文献は早くから知られておりまして、かつて東北大学の堀一郎先生は『民間信仰』（岩波全書・昭和二十六年）の中でよく利用されて補陀落渡海を論じられておられます。ところが『熊野年代記』という文献は、実は三冊本の総称でありました。『熊野年代記古寫』『歳代記第壹』『年代記第貳』の総称です。それが書写本といいますが、諸本がありまして、その中の最も古い写本として『熊野年代記古寫』があるのです。本日は、この『熊野年代記古寫』を紹介、提示いたしました。『熊野年代

記古寫』は写本でありますので、誤写もあります。個々の渡海上人を検証するには複雑な史料操作を要します。ここでは『本願中出入証跡之写別帳』や『過去帳』、および位牌銘などを校合して各上人たちの要点だけを紹介しておきたい思います。

- 慶龍上人―貞觀十年（八六八）十一月三日渡海。
- 祐真上人―延喜十九年（九一九）二月渡海。奥州会津郡の人。同行十三人が同伴。
- 高巖上人―天承元年（一一三二）十一月渡海。
- 祐尊上人―嘉吉元年（一二四二）十一月渡海。四十三歳。
- 盛祐上人―明応七年（一四九八）十一月渡海。三十八歳、同行五人が同伴。
- 足駄上人―享祿四年（一五三二）十一月十八日渡海。本名祐信上人、四十三歳。
- 光林上人―天文八年（一五三九）十一月渡海。二十一歳、同行十六人が同伴。
- 正慶上人―天文十年（一五四二）十一月渡海。同行十人が同伴。
- 善光上人―天文十一年（一五四三）十二月渡海。十八歳、同行十二人が同伴。
- 日譽上人―天文十四年（一五四五）十一月渡海。同行五人が同伴。
- 梵鷄上人―弘治二年（一五五六）十一月渡海。同行十八人が同伴。
- 清信上人―永祿三年（一五六〇）十一月渡海。
- 清源上人―天正六年（一五七八）十一月渡海。両親の為であった。
- 心賢上人―文祿三年（一五九四）十二月渡海。同行六人が同伴。

○清雲上人―寛永十三年（一六三六）三月十八日渡海。

○良祐上人―承応元年（一六五二）八月渡海（示寂）。

○清順上人―寛文三年（一六六三）九月二十五日渡海（示寂）。武州江戸の人。

○順意上人―貞享三年（一六八五）六月六日渡海（示寂）。五十歳。

○清真上人―元禄六年（一六九三）十一月二十六日渡海（示寂）。

○宥照上人―享保七年（一七二二）六月七日渡海（示寂）。五十三歳。和州郡山の人。

『熊野年代記古寫』には二十名の補陀落渡海僧を拾うことができます。平安時代、九世紀の慶龍上人から江戸時代の一七三二年、最後の享保七年に渡海した宥照上人まで二十名を知ることができます。ただし、補陀落渡海は、いわば生きたまま渡海することが本義でございます。これが江戸時代の当初から批判を浴びるようになり、自分から命を捨てることはいけない、江戸時代の儒教精神から自死が非常に批判的に見られるようになります。当然、補陀落渡海が注目を浴びました。そして、生きたままの補陀落渡海が行儀が変容、変質する機縁となつたのが金光坊という人の渡海であつたと言われております。

金光坊の補陀落渡海については、武内玄龍著『熊野巡覧記』（寛政六年）に次のように伝えています。

補陀洛寺……此寺の住職にてもや有りけん、今も古来の儀式とて、此寺住持僧死期に臨みて舟に乘せ海中へ水葬し、補陀樂渡りと云由。中比、金光坊と云僧住職の時、例の如く生きながら入水せしむるに、此僧甚だ死をいとい命を惜しみけるを、役人は非なく海中へ押入ける。是より存命の内に入水する事止りぬ。今に金光島と

て綱切島の辺に有。今は住僧入寂の後に其儀式有と申伝ふ。

金光坊は補陀洛山寺の住職であつたようですがよく分かりません。補陀落渡海を断行しなければならぬ運命を背負つた人であつたようですが、金光坊は死を厭ひ、命を惜しみ補陀落渡海を拒否しました。ところが役人たちが無理やりに金光坊を那智湾に浮かぶ島に沈めてしまいました。そこで金光坊が沈められた島を金光坊島と呼び、現行の地図にも記載されています。

注目されますのは、金光坊の事件をきっかけに、補陀落渡海が江戸時代の初期から、補陀洛山寺住職たちの遺体を海に流す水葬儀礼を補陀落渡海と呼んだことです。中世末期までは生身の現身のままで実践していたのですが、江戸期になると補陀落渡海は精神だけ生きて、水葬、すなわち遺体を海に流す実体を補陀落渡海と呼んだ点です。したがつて『熊野年代記古寫』にみえる近世以降の渡海上人の年月記録は、各上人たちの示寂日と考えられます。なお、井上靖の短編小説『補陀落渡海記』は、金光坊の補陀落渡海に至る心理的苦悩を描いたものであることはよく知られていることです。

本日は金光坊の話を少し詳しくお話しようと思つたのですが、時間の関係上、簡略しております。ただ無理やりに沈められた金光坊の亡霊が紀州の海辺にまだ棲んでいるという伝説は是非紹介しておきたい思います。その伝説は、金光坊の亡霊が「ヨロリ」という魚になつて今も生きているのだという話です。「ヨロリ」と呼ばれている魚は、学名を「クロシジカマス」と呼ぶ黒肌魚です。世界的な博物学者として知られる南方熊楠も『日本及日本人』(七八九号)の中で「紀州東牟婁郡那智村浜の宮なる南海補陀洛寺の例(ためし)として、住職死に瀕する時、舟に乗せ、大勝浦の沖で不断白き荒浪を被りおる綱切島という小岩島へ伴れ行き、綱を切り水葬した。後にはそれより近き金

剛坊という小島へつれ行きて水葬した。かく死に切らぬうちに水葬された僧の亡魂が、ハマチとスズキを混じたようなヨロリという魚に生まれ、三木の崎と潮の岬の間を限つて棲む、と聞いた」と紹介しています。いずれにしても、金光坊の一件は、補陀落渡海の歴史と変容性を考える有効な話題を提供しており、今もなお金光坊の名が島名となつて生き続けている事実に注目しておきたいと思います。

補陀落渡海史を構築するにあたつて、私も補陀落渡海の記録をずいぶん集めました。補陀落渡海は渡海の行為そのものが注視されて記録が残りました。南方に向かつて出帆したけれども、その後どうなったのだろうか、本當に補陀落世界に着いたのだろうか、往生したのだろうか、それとも入水して船も壊れて沈んでしまったのだろうか、そういう補陀落渡海の結果を知る史資料は皆無と言つてもいいと思います。補陀落渡海行為そのものの記録は多いが、結果を述べる史資料は少ないのです。

ところが一つだけあります。それは日秀上人の補陀落渡海です。日秀上人は那智の海岸から補陀落渡海を試み、沖繩県の金武に漂着しました。日秀は漂着した琉球金武の場所を補陀落と思い観音堂を建て、やがて彼は沖繩の神社仏閣を修理修復して活発な宗教活動を展開しました。琉球王の庇護を受け、やがてまた日秀は鹿児島に上陸して薩摩国で活動しました。日秀上人については数本の縁起がありますが、薩摩藩の地誌『三国名勝図会』収録の『日秀上人伝記』は後出本とはいえ基本的な文献です。

日秀上人は渡海船に乗つて補陀落世界を目指しました。彼の船は、船底に穴が細工され、その栓を抜くと海水が入つてきて沈没する仕掛けになっていました。ところが日秀上人の補陀落漂着を実現させようという計らいでしゅうか、突然、海底から鮑が出てきて船底の栓穴に密着し、海水の浸入を塞いだという話を『日秀上人伝記』は載せています。

そして驚くことに、縁起に登場する鮑殼が鹿児島県隼人町の日秀神社（旧三光院）に伝えられています。どなたが残したのでしょうか。ある檀家さんの家に残っていたそうです。実物を見ますと鮑殼の中央がすでに欠けています。しかし、よく見ますと、内側に「南無」の文字が浮き彫りされていることが分かりました。おそらく「南無阿弥陀仏」と書いてあつたに違いありません。日秀の遺品として永祿七年（一五六四）銘の「南無阿弥陀仏」名号掛軸も残っています。

問題は『日秀上人伝記』が何ゆえに鮑の一件を収載したかという点です。どうして、このような縁起が作られたのか、その点を少し考えてみました。まだ推測の域をでませんが、和歌山県的那智の滝水に語られる延命信仰との関連です。『源平盛衰記』（巻三）「法皇熊野山那智山参詣事」によりますと、花山法皇が那智山を参詣された時、那智の滝壺に鮑を放たれました。その後、白河上皇が参詣されたおり、鮑を拾いあげたところ、傘ばかりの大きさに成長していたという話です。それゆえに那智瀧の水を身に浴びる者は長寿を得るという話です。これだな、と私は思いました。実は日秀の出帆場所については不確定な要素があつたのですが、『慶長見聞録案紙』や、それを書写したと考えられる伴信友『中外経緯伝草稿』によって日秀上人の出帆場所が那智であつたことが分かりました。そうしますと、日秀は那智から出帆して沖繩に熊野信仰を運んだということになるでしょう。現在の沖繩県の神社仏閣には阿弥陀、薬師、観音が多く祀つてあつたといえます。この三仏は熊野神の本地仏です。日秀は仏師でもあり、たとえば『琉球国由来記』は波上山権現社に奉納した日秀仏として「熊野三所権現・御本地三尊形像」の銘を伝えています。日秀は既にふれましたように沖繩の神社仏閣を復興していききましたけど、その時に熊野の信仰を沖繩に定着させていったことが分かってきたのであります。それはまた『日秀上人伝記』に熊野を素地とする鮑伝承が語られる蓋然性があつたことになるでしょう。

沖縄の宗教史では、先駆的人物として袋中が説かれ、彼の『琉球神道記』が常に引き合いにだされますが、袋中以前に日秀の活動があったことを考慮しなければなりません。しかも『琉球神道記』において琉球の神社仏閣が熊野神を祀るという記載は、日秀の活動を踏まえた記事であろうと考えられます。そういうふうに理解すべきであろう、と最近思っているのでもうございます。

このような補陀落渡海の記録として、私は文献や金石文や、あらゆる資料を探しているのでございますが、補陀落渡海を記録する石碑、いわゆる石塔が全国に三基残っております。ひとつは、弘円上人の渡海碑です。熊本県玉名市に残っています。銘文によりますと、弘円上人は下野国の人で、永禄十一年（一五六八）仲間の善心上人と道円上人を伴って九州の有明海から南方に向かって船出したようです。弘円たちの渡海船について近世の地誌『肥後国誌』は「土船（泥船）であったと伝えています。たいへん興味深い伝承であり、昔話「かちかち山」を思い出します。もう一基は夢賢上人の渡海碑です。これも熊本県玉名市に残っています。夢賢上人も下野国の出身で、天正四年（一五七六）に出帆しました。

最後の一基は大阪府泉南市の林昌寺に残る祐海上人の補陀落渡海碑です。銘文に「肥前国之住温泉山祐海上人」とあります。「温泉山」は「うんぜんさん」と読み、現在の雲仙岳のことです。雲仙岳は平成四年に主峰の普賢岳が噴火して大変有名になりました。雲仙岳は実はキリスト教が伝来するまでは修験の山でありました。その温泉山（雲仙）山伏が和泉国から補陀落渡海したことを銘文は伝えています。

それでは、最後に高海上人の補陀落渡海について話をしたいと思います。補陀落渡海は和歌山県的那智を拠点にして太平洋側に多く見られます。そして、補陀落渡海是那智山を北上した地域には無いのだらうと思っております。ところが私の勉強不足でありました。実は、関東地方から補陀落渡海をした人がいたのです。それは『那珂湊

『那珂湊補陀洛渡海記』が語る高海上人の補陀落渡海です。『那珂湊補陀洛渡海記』は、現在、東京お茶の水図書館にございます。作者は茨城県水戸市の六地藏寺第三世であった恵範という学僧です。恵範は心車と号しました。恵範の「恵」と「範」の漢字の一部「心」と「車」をとった号です。

この恵範が享禄四年（一五三一）那珂湊から出船した高海上人の補陀落渡海を詩情豊かな本文で綴ったのが『那珂湊補陀洛渡海記』です。実に素晴らしい文章、本心に仏教文学といってもよい作品でございます。

『那珂湊補陀洛渡海記』は多くの内容を含んでおりますが、なかでも作者・恵範は、那珂湊から出帆する高海上人を見送る「奉送の伽陀」（偈頌・詩歌）を作っています。五文字一句の四段、十六行の詩歌です。作者恵範が文才をいかんなく發揮して書いた作品です。

高山神山生	深海龍王宿	海岸孤絶峯	観音接化道
海公何因縁	廣大善根殖	上補陀洛高	音楽遊戯場
上下南西北	无倦勵行徳	水立又坐樹	来去更別无
人勸安楽国	際度益為本	波平舟行直	迎接海内外
木為粮年越	生別菩薩衆	鎮令唱佛名	勢佛亦无我
食断如飛之	死敢不恠人	打杖一片補	至自他同一
草衣修佛前	海公本所愛	苦拔祈弥陀	随願生任心
衣破遊諸州	渡海観音敬	空不着京洛	後生淨刹中
別離不悲旅	常為留无便	岸啐又啼溪	弥碧海遠去

火木先王宿	樂生初禪得	下至十念色	陀佛阿弥此
浴流二六常	我執自遠離	風来温鉢山	放逸者知不
水斷回幾州	淨水見无欲	樹葉遮雨色	光来去寒遠
湯泉誰瑞吉	四時涌出常	恒流阿鑊名	應知大秘密
殿隣大福田	德巢庫藏在	吟行景催觀	聲風樹妙嚴
精進絶倫大	山助又河補	妙因出濁世	即身得即佛
進趣覺山坂	登觀音弥陀	法音又樂音	現遊安樂国

惠範は、この「奉送の伽陀」について次のような説明をしています。

右二八の偈頌は、^{たてさま}豎に下るには異曲無し。^{よしやま}横に行くには^{くつかわり}查冠有り。第一句に謂く。海公の行徳を冠と爲し、^{しょうえん}生縁の旅宿を^{くつ}杳と爲す。第二句は、生死海と涅槃山とを上と爲し、便得離欲して補陀に^{まい}往るを下と爲す。此の句の中に際^{さい}の字有り、横に字鉢を呼び、^{かたち}豎は巧みに音を借る。第三句は、風声波音、妙法を吟するを首と爲し、補陀山鉢、觀音の容^{かたち}を尾と爲す。第四句は、^{さんしやう}三聖の来迎を經文に次て天と爲し、^{こしん}己心の弥陀、即ち密嚴を地と爲すのみと。

注目されますのは、右「奉送の伽陀」十六行には查冠（くつかぶり）という詩文の技巧を使用している、と惠範が告白している点です。杳冠とは「ある語句を歌の毎句の首と尾に一音ずつ詠み込む」作文上の技法です。そこで

惠範の指示にしたがい右「奉送の伽陀」の首と尾を並び替えますと（一句五文字の上と下の字を横に読む）、次のような新たな詩文を抽出することができます。

高海上人	木食草衣	別火欲水	湯殿精進
生縁北国	越之前州	旅宿常州	吉田大坂
深廣无際	生死海渡	常樂我淨	四德山登
宿殖德本	衆人愛敬	便得離欲	常在補陀
海上水波	鎮打苦空	岸下風樹	恒吟妙法
峯高樹直	名補陀落	溪色山色	名觀世音
觀音來迎	勢至隨後	弥陀放光	應聲即現
道場无外	我一心中	去此不遠	密嚴佛国

右の偈の第一句「高海上人、木食草衣、別火欲水、湯殿精進」は、惠範が説明するように高海の行徳を示した詩文でありまして、第二句の「生縁北国、越之前州、旅宿常州、吉田大坂」は、高海の生縁と逗留地をあらわした詩文です。ここでは一部の説明となりますが、高海上人は木食行をしていた、つまり穀物を食べないで木の実や根を食べていた。そして、おそらく湯殿山あたりでも修行したのだろうと思われます。そして、渡海した高海上人の出自が「生縁北国」、さらに、その下に「越之前州」とあり、これは出身が越前国であったことを示しています。さらにまた「旅宿常州」とあり、旅を重ねて「常州」常陸国にやって来た。そして「吉田大坂」に定着した、と解釈できると思います。「旅宿常州」、すなわち常陸国まで分かったのですが、「吉田大坂」が随分わかりませんでした。

というのも、私はずっと関西におりますので「大坂」と言いますと、どうしても関西の大阪を思い出します。どうして高海上人が突然関西にやってくるのだろうと不思議に思っていたのでございます。のちに『常陸国誌』など調べましたら、「吉田大坂」は常陸国吉田郡であり、「大坂」は水戸市にあった大坂町であろうと気づきました。当地には虚空蔵堂があったようですが、高海上人は、ここで補陀落渡海船を作りました。そして二十二名の結縁者を募り、那珂川を下り太平洋側の那珂湊に着いて、ここから渡海しました。永禄四年十一月十八日のことであります。

驚くことに、永禄四年十一月十八日は、足駄上人が熊野の那智から、まったく同年同月同日に補陀落渡海をしていたのであります。永禄四年に東西二つの渡海が同時におこなわれた、そういう大変稀有な現象でありました。

時間がまいりました。こちらあたりで私の話は中止しなければなりません。いづれにしても補陀落渡海は、死を賭した、観音にたいする実践的な信仰表出でありました。冒頭でも申し上げましたように、補陀落渡海は『日葡辞書』にも立項されており、十六世紀には現実の言葉でありました。キリスト教の宣教師たちは実際に補陀落渡海を見て驚いているわけです。大坂の堺や愛媛の堀江（松山）海岸で実際に見たりしています。日本人の信仰の篤さは見習うべきだと評価し、日本側の文献では知られない客観的な文献としてキリシタンの報告書や書簡には、今後目を作る必要を感じます。

今なお私は、補陀落渡海について調べておりますけれども、「那智参詣曼荼羅」に補陀落渡海が描かれていたことは実に幸いでした。その絵を説明したのが熊野比丘尼という女性たちであったといわれています。「那智参詣曼荼羅」を絵解きした確実な文献はまだ見つかっていませんが、熊野比丘尼たちは「観心十界曼荼羅」「熊野観心十界図」という地獄絵を絵解きしたことは文献に即しても、絵画史料に即しても明らかとなっています。そうしますと、「那智参詣曼荼羅」や「観心十界曼荼羅」は、人間の肉声による説明を伴って、初めて意味のある絵画であり、絵解き

することによつて絵画は生きてきます。そうしますとまた、絵解きした熊野比丘尼たちをもつと調べなければなりません。どういうふうな絵解きをしたのだろう、どういうふうな説明をしたのだろうと、熊野比丘尼の生態や絵画の機能を追究する必要があります。これらを含めることによつて、ますます補陀落渡海の絵画場面が肉付けされ、膨らんでいきます。そういう課題を抱えて、少しでも仏教文学や日本宗教史に寄与できればと思い、私はいま、熊野比丘尼研究に力を注いでいるのでございます。

本日は伝統ある駒澤大学仏教文学研究所の講演会にお招きいただき、重ねて御礼もうしあげます。つたらぬ話をご静聴いただき、ありがとうございました。